15.誰でも行きやすい子ども食堂とは：全ての子ども達に居場所を与えるために

岸田彩里

1.誰でも行きやすい「子ども食堂」とは

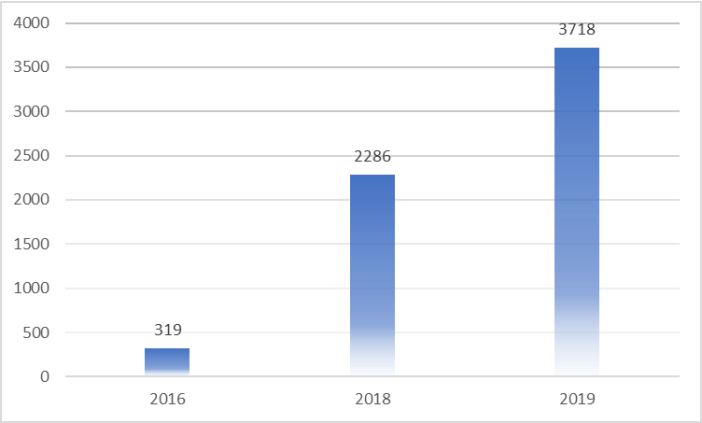
現代社会で急増している「子ども食堂」。子ども食堂の定義として Wikipedia では「子どもやその親、および地域の人々に対し、無料または安価で栄養のある食事や温かな団らんを提供するための日本の社会活動[1]」とされている。筆者は今までに合計で５カ所の子ども食堂に訪問したが、ほとんどの子ども食堂がとても楽しい空間であった。子ども達も明るい子たちばかりで、積極的に話しかけてくれる子が多く、また私たちも、元気で楽しげな子どもたちからエネルギーを受け、こちらも楽しむことができる場所だ。この「楽しい時間が増える」「思い出が作れる」という面は子ども食堂の大きな利点であるがこの面は少し視点を変えると、場の明るい雰囲気を苦手とする子ども達はこういった子ども食堂に「行きづらい」または「子ども食堂という存在を敬遠してしまう」といった問題が発生するのではないかと考えた。本稿はそういった人見知り、または人と会うことを苦手とする子ども達にも比較的明るい雰囲気である子ども食堂に来てもらうためにはどのような改革が必要であるのか、その改革で子ども達が得られる能力、子ども食堂が予示・啓示する新しい社会の在り方や子ども食堂が持つ潜在的な可能性について、自らの経験とともに考察していく。

2.子ども達の居場所とは

一般の子ども達（ここでは小学生を対象とする）の行動範囲としては、自宅、公園、習い事、ショッピングセンターなどが挙げられるが、やはり子ども達がより多くの時間を過ごしている場所は「学校」であろう。平日は朝から夕方まで学校で過ごしているため、子ども達の家族以外の人間関係はクラスメイトや教員に留まってしまう。そのため自宅、学校に続く第 3 の居場所に「子ども食堂」を配置することでクラスメイトや教員に留まらない新しい人間関係が構築される。しかし先ほど 1 で述べたように、子ども達の性格によってはこの子ども食堂に「行きづらい」と考える子が少なからず存在している。家庭に続く第 2 の居場所として挙げられるこの「子ども食堂」の存在を性格による「行きづらい」という感情だけで消し去ってしまうのはあまりに惜しい。そんな消極的な子ども達にも「子ども食堂」という居場所を提供すべきだ。

3.子ども食堂の増加推移

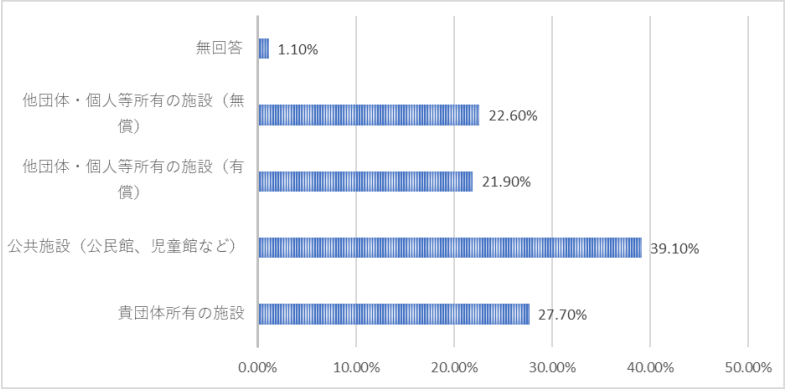
ここでは子ども食堂の増加数の推移について詳しくみていく。先ほど 1 でも述べたように子ども食堂の数は年々増加傾向にある。NPO 法人の「全国こども食堂支援センター・むすびえ」という団体の調査によると、子ども食堂の数が増加し始めた 2016 年から 2019 年 6 月までの約 3 年間で 12 倍もの子ども食堂が増加している[2]。（図 1）この子ども食堂増加の背景として多くのメディア報道が関係していると考えられるが、貧困問題を解決するために作られた子ども食堂をメディアが注目し取り上げていることから、日本がいかに貧困を問題視しているかが分かる。



（図 1）過去 3 年間の子ども食堂数の推移　R1　NPO 法人「2019 子ども食堂調査結果」

4.子ども食堂の開催場所

ここで、農林水産省が 2018 年に発表した調査書を参考にしながら、子ども食堂の開催場所について詳しくみていく。この調査書は「子ども食堂向けアンケート調査　2018」という名称で、「広がれ、こども食堂の輪！」全国ツアー実行委員会・各都道府県実行委員会のネットワーク、こども食堂全国ネットワーク及び全国社会福祉協議会のネットワークにつながる運営者を対象にした調査である。この調査書によると、子ども食堂の開催場所として最も多いのが公民館や児童館の公共施設であることが分かる[3]。（図 2）このことから子ども食堂の開催場所として、主に公共施設などの「子ども達が遊ぶときに利用する場所」が最も多く選ばれており、「子どもが利用しやすい場所」と言い換えることができる。市民館や児童館などの公共施設は子ども達が放課後などに多く利用している施設のため、多くの子どもたちに利用してもらうことを目的とした子ども食堂の開催場所としては大変合理的であるといえる。



（図 2）子ども食堂開催場所　H30　農林水産省　「子供食堂向けアンケート調査」（複数回答可）

以上の農林水産省の結果から、今回子ども食堂の開催場所として選ばれやすい公民館に焦点を当てていくこととする。

5.子ども食堂の改革

5.1　安心できる子ども食堂

まず、筆者が思い描く子ども食堂の在り方としては、家とは違うもう一つの「家庭」のよ

うな安心できる暖かさの詰まった子ども食堂である。子ども食堂最大の利点である「楽しかった」と子ども達に思ってもらえることも大事だが、その感情よりも大切なのは子ども食堂の存在が「安心できる場所」であり、かつ「また行きたい」と思ってもらえることである。安心感がある場所といえばやはり家庭であり、家庭の暖かさが今の子ども食堂に必要なものと考える。子ども食堂は単なる「子ども食堂」という枠組みではなく、自分の家庭の一種のような暖かい居場所を子ども達に提供すべきだ。

5.2　新しい子ども食堂に必要な空間

暖かく安心できる子ども食堂にするためには、自宅のように実際に寝転びのんびりできる空間が必要であろう。やはり安心できる場所とは自宅のような慣れ親しんだ所であり、その空間に似た場所を作ることで擬似的な「家庭」を作ることができるためだ。では子ども達にとって「ゆったりできる」子ども食堂とはどういったものなのであろうか。今回は、先ほど図 2 で最も多く子ども食堂の開催場所として選ばれていた公民館での運営について考えていく。

まず重要なのが雰囲気作りである。床は多くの公民館が利用しているタイルのものではなく、一般の家庭がよく利用しているカーペットを敷く。そして公民館に置いてあるテレビをレンタルし、そのカーペットの上に置くのだ。カーペットとテレビを置くだけで、まるで自分の家かのような感覚になり、安心するスペースが生まれるのではないかと考える。また机に関しては、背が低い机とし、椅子を用意せず床に座ってみんなで食べる。私が参加したほとんどの子ども食堂では机と椅子がセットで用意されていたが、それでは部屋が窮屈に感じ、また小さな子どもが椅子と椅子の間をすり抜けて走り回り転倒している子もいた。そのため今回の子ども食堂では椅子を無くし、机を低くすることで子どもの転倒防止にも繋げることができる。

5.3　多くの友達をつくるために

また、本稿のテーマとしている「場の明るい雰囲気を苦手とする」に来てもらうためには、やはり子ども達の自由行動を無くすべきだ。多くの子ども食堂はご飯を作っている間や片付けをしている間は子ども達を自由に遊ばせているため、その間は子ども達が「走り回る」、「トランプをする」、「携帯ゲームで対戦をする」などの遊びを自由にしていた。これは子ども達に友達がいる前提、または子ども達は誰とも仲良く遊ぶことが出来る前提になってしまっているのではないか。つまり、このままでは 1 人で来ている子をすぐに追い出してしまうようなある意味一部に冷たい子ども食堂になってしまうのではないか。この子ども達への偏見こそが、場の明るい雰囲気を苦手とする消極的な子ども達が子ども食堂に行きづらくなってしまう大きな原因であると考えられる。そのため、子ども達がご飯を食べ終えたらくじ引きで何人かのチームを作りゲームなどで遊ぶのはどうだろうか。くじ引きでチームを決めるため、たとえ 1 人で来ていてもグループは自動的に決まり、ゲームを通して新しい友達を作ることが出来るはずである。

そしてこの「チームをくじで決める」という点は友達と複数で来ている子にも利点がある。今まで参加してきた子ども食堂に共通しているのは、始まりから終わりまで仲の良い友達とだけ遊び、自分の友達以外の周りにいる子とあまり仲良くなろうとはしていない点だ。

「周りの子と仲良くならなくても自分には遊ぶ子がいるし大丈夫だ」と考えている可能性があるが、元々「子ども食堂」は様々な年代が参加しており、他世代交流の場である。こういった同じメンバーで固まりがちな子ども達にも、「くじでチームを決める」ことで、多くの子ども達と交流でき、新しい友達も増やすことが出来るのではないだろうか。

5.4　遊び内容の具体例

遊び内容の具体例の一つとしてはかるたなどの室内用のゲームを用いるというものだ。かるたなどは多くの子ども達が経験している遊びであり、仮に未経験の子がいたとしても、かるたなどのルールは非常に覚えやすいものであるためすぐに経験者についていくことが出来るはずだ。かるたなどは毎回 4 セットほど用意し、1 セットを 2 チームで向かい合って使えば最大 8 チームまで遊べることができるため、参加人数が多い日でもかるたができないというチームを無くし、全員が同じように同じような時間量で遊ぶことができるはずだ。

また、もう一つの例としてはチーム対抗戦のクイズ大会だ。クイズはインターネットなどで容易に入手することができるため、比較的行いやすい。手順としてはスタッフの一人がインターネットなどでクイズを調べ、部屋にいる子ども達にその問題を伝える。そして子ども達に 3 分ほど考える時間を与え、チームで相談し出た答えを大きな字で紙に書き 1 チームずつ発表するといったものだ。正解したチームには 1 ポイント与えられ、そのポイントが貯まるとお菓子がもらえるといったようなものにするとより子ども達が楽しんでくれるはずだ。

このように時間によって、または日によって遊びの内容を変えることは様々な遊びに触れ、成長していく子ども達にとって重要なことである。また今回の例であげた「かるた」「クイズ」には子ども達に必要な能力を養うことができる効果もある。「かるた」には自分で札を探すことで積極性が身につき、様々な人とかるたをすることでコミュニケーションの要素も養うことができる。そして「クイズ」にはチーム全員で問題を考える際に知的探究心や協力性を身につくことができるのだ。

このように、「遊び」一つで子ども達に必要な多くの能力を養うことができる。子ども食堂はそのような「遊び」を通して、多くの子ども達とコミュニケーションを取りながら必要な能力を養う場という潜在的な可能性を秘めている。そのような可能性があるからこそ、多くの子ども食堂のように子ども達が自由に遊び回る遊びではなく、大人達が少し工夫をして、学校とは違う「学び」を子ども達に養ってもらうべきなのだ。そして子ども達に「学べる遊び」を通して、「子ども食堂」というものを自分が成長できる場として自分自身の居場所としてもらうべきである。

6.全ての子ども達が参加したくなる子ども食堂

今回、明るい雰囲気の子ども食堂を敬遠しがちな子ども達にも「子ども食堂」という場所を自分の 1 つの居場所として持ってもらいたいという願いを込めて、どんな性格を持っていても行きやすく楽しめる子ども食堂とはなにかについて考えた。消極的な子ども達、そして友達と複数でいる子ども達に必要なことは、やはり話したことのない人との交流である。彼らの問題点は、前者の子ども達は自分から話しかけに行くのは苦手だという点、そして後者の子ども達は接する人を身内に限定しがちという点だ。そのために取った策が「くじで決

めるチーム分け」であり、顔見知りの人や話したことのない人と直接的に交流し、そのなかに「学べる遊び」を入れることで子ども達がより成長できる場となるのだ。

以上のことから、子ども食堂が予示・啓示する新しい社会の在り方は“様々な人と会話をすることでコミュニケーション能力を養うことができるもの”という点であり、子ども食堂が持つ潜在的な可能性とは“遊びを通して学校とは違う学びを得る”点であると考える。子ども食堂が地域全員の憩いの場となれば、誰でも気兼ねなく行ける場所となるのではないだろうか。

【参考文献】

1.不明、wikipedia、「子ども食堂」、https://ja.wikipedia.org/wiki/子ども食堂、（2020/1/20）
2.湯浅誠、NPO 法人全国こども食堂支援センター・むすびえ、「【プレスリリース】こども食堂 1 年で 1.6 倍、過去を上回るペースで増え続け、3700 箇所を超える。」
https://musubie.org/news/993/、（2020/1/28）
3.農林水産省、農林水産省 HP、「子ども食堂向けアンケート調査 集計結果」
https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/syukeikekka.pdf、 p 18、（2020/1/29）